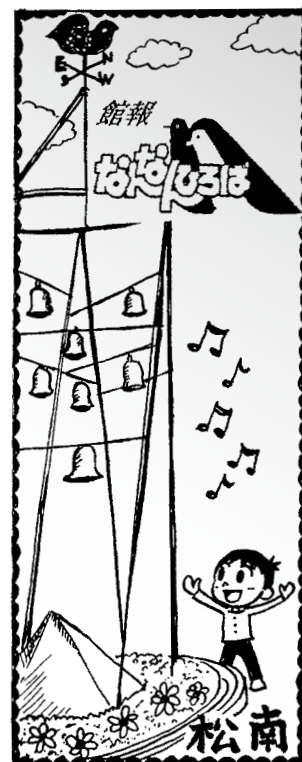




公民館報「松南版」10年

平成18年より南部(松南・庄内)版が、庄内地区公民館落成に伴い地区版は、松南版、庄内版として発行されることになりました。早いもので、松南版66号(3月30日発行)でまる10年となります。

公民館とは

館報編集委員は「公民館報とは何か」を常に考えながら、紙面づくりに取り組んでいます。

広報誌、商業紙とは異なり、住民の目から見た地域の問題、行事、話題等について紹介、中立的立場にたつて記事にしています。

松南地区発足50年

終戦後、軍需工場で働いていた人達、満州などから引き揚げてきた人々、いろいろな所から移り住んできた人により町ができてきました。昭和36年に、松南地区が誕生

生し、平成23年には、松南地区発足50年の大きな節目を迎えました。

この機会に松南地区の歴史、50年の歩みを、住民の皆さんに知っていただきたく、いろいろな企画をしてきました。

今昔ものがたり

平成19年5月30日から平成20年5月30日号の6回シリーズで、古墳・平安時代(出川南遺跡)から平成20年までの代表的な出来事を記事にしました。

館報でつづる

松南地区の50年

平成22年5月30日から24年1月30日号の10回シリーズで松南地区9町会の歩みを町会の皆様に紹介していただきました。

関係団体

老人クラブ、体育協会、こども会育成会、安協南松本支部、南松本商工振興会、地区社会福祉協議会、健康づくり推進員会、日赤奉仕団松南分団、ボランティア松南、衛生協議会、防災会の11団体に松南地区50年関連記事を代表の方に書いていただきました。

町内公民館

平成24年5月30日から26年1月30日号で、町内公民館の歩み、活動を報告していただきました。

わがまち再発見

松本市の地区再発見事業に基づき、テレビ松本「わがまち再発見」松南地区版の内容が平成25年8月の拡大館報松南版編集委員会で検討され、同町会長会、同町内公民館長会の協力で事業に取り組むことになり、すでに収録は終了しています。

松南地区公民館

平成26年4月1日より南部

公民館の名称が変更され、松南地区公民館となりました。文字どおり松南地区の公民館となりました。

松南地区「史跡マップ」

館報松南版編集委員会の委員を中心に、松南地区史跡ゾーン整備研究委員会(塩原保彦委員長)を立ち上げました。松南地区町内公民館長会(百瀬壽会長)、南部公民館(上條恒嗣館長)の大きな力で、平成25年度末に完成しました。

松本市松南地区史跡マップ解説書では、これまで館報で警察予備隊、保安隊、自衛隊関係について取り上げたことはありませんでした。松南地区、鎌田地区には、多くの元隊員が住んでおり、取材には苦労しました。松本部隊は、A・B・Cの3地区に駐屯し、その宿舎は、A地区は前芳野町町内公民館付近、B地区は宮田東町内公民館付近にありました。現在は、警察予備隊は、自衛隊となり、当時のC地区に集約されており、平成26年3月22日に発行されました。

案内看板は、縦90センチ、横150センチのアルミ製で、なんなんひろばの駐車場「カリヨンの鐘」隣に、そし

て東京インテリア家具の東側道路沿いの敷地内に建てられました。

これからの10年

現在、シリーズの「わがまちのお宝」「人物紹介」は続けていく予定です。今後も住民の皆様の目線で、取材し、記事にして参ります。

身近な話題、問題などを松南地区公民館までお寄せ下さい。

(塩原保彦)



只今会議中

公民館報「松南版」編集委員会

妻籠宿を訪ねて

11月6日、町内公民館長及び館報編集委員の方々等約30人で、紅葉の南木曾町妻籠宿を訪ねました。地域づくりと公民館活動の先進地です。「妻籠を愛する会」の方の案内で、旅情ある街並みをゆったり歩きました。

妻籠は、中山道の宿場町として繁栄したものの、明治以降は鉄道や国道が開通し、戦後は経済成長から置き去りにされた寒村でした。そこが逆転、残された町並みを見直し、打って出たのが妻籠宿です。折から高度成長に疑念が湧き始めた昭和40年代、「貸さない、売らない、壊さない」を絶対的な信条に、住民による地域づくりに懸けた姿勢は、一挙に注目されました。以来、その実績は全国に伝わり、「町並み保存」第一号として、地域づくりの揺るがぬ模範と評価されてきました。

地域に人あり。島崎藤村の実兄広助は、御料林問題では明治政府と、また「電力王」福沢桃助とも、木曾の利権を確保するため四つに渡り合いました。そして現在は、「愛する会」理事長の小林俊彦さんがいます。妻籠宿保存運動

時代の流れと伝統文化

年末には餅をついて鏡餅をつくり、門松を飾って新年を迎える。正月明けには三九郎で、書初めや松飾りと願い事をしたお札や達磨等を燃やし

を全身で担って半世紀。意気軒昂、高齢の今も地域をリードしています。歴史は風土となり、人を育むのでしょうか。

地場産業のろくろ細工を「木地師の里」に訪ね、帰路につきました。でも思い起こすのは、「愛する会」の方の「妻籠も空き家が進行し、宿場を担い切れるか不安です。」のひとつです。個人の力に頼る時代は終わり、思いを共有する人達の小さな力を寄せ集める「共同」の時代を迎えているのではないのでしょうか。思いを正す一日でした。

(白澤幸男)



ながら繭玉を焼いて食べ、無病息災を願う。そして、新しい年への決意や願い事をす。しかし、そんな昔からの伝統行事が時代と共に薄れていくことを危惧する人が多くなっている。

そこで、町内の文化祭での様子や繭玉づくり講座、三九郎の様子を紹介する中で、伝統文化の伝承について考えてみる機会にと、実情について取り上げてみました。

町内の文化祭から

菊咲きほこる11月。宮田東公民館において文化祭が開催されました。

文化祭色を醸し出す菊の鉢花で飾られた会場には、古い文化を窺い知る事のできる農具やカバン、書、写真、生け花、手芸の会による作品の数々、また有志の方々の「自慢の逸

品」も並び、来場者の足を留めさせていました。アトラクションのマジックショーでは、子どもさん達も集まり、数々のマジックに目を丸くしながら楽しいひと時を過ごしました。

また、「東友会」の方々の指導による古代の火おこしや餅つき、石臼を使つてのきな粉作りを体験してもらい、老若男女が協力しあいつき上げた餅は、きな粉・あんこ・ごまに仕上げられ、大鍋で煮込んだ豚汁とともに、皆で「こし」のある餅を堪能しました。

最近の家庭では、「餅つき器」を使つての餅つきさえほとんどされないと推察するところですが、そんな中で臼と杵を使つての餅つきを、子どもさん達に体験してもらえた事は、とても有意義であつたと思います。しかし、残念なことに、このところ食品衛生上の観点から餅つきなどの行事を催しから外すという

報道が聞かれる様になりました。確かに、安全衛生は大切ではありますが、餅つきを含めた様々な日本の食文化の伝承も途切れさせたくないものだ、この文化祭において痛切に思った次第です。

(松沢啓二)

繭玉づくりと三九郎から



1月7日(土)『繭玉づくり講座』なんなんひろば調理室にて20余名の小学生が参加。児童センターに通う保護者や民生委員、ボランティアの方々に教えていただきながら繭玉づくりを。



1月7・8日(土・日)各町会毎に、午前中は門松やお札、達磨等を集め三九郎づくりを。午後2時頃から焼き始め、火の弱まるのを待ち繭玉を焼く。両日とも、どの町会も大勢の親子が集まり火を囲む姿が見られた。